

授業改善のためのNIE

—群馬県板倉町立北小学校NIEシンポジウム2010の記録—

所 澤 潤¹⁾・石 田 成 人²⁾・関 口 修 司³⁾
吉 成 勝 好⁴⁾・渡 辺 祐 希⁵⁾

1) 群馬県NIE推進協議会会長・群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

2) 群馬県板倉町立北小学校校長

3) 東京都北区立東十条小学校校長

4) 新聞教育支援センター代表

5) 群馬県板倉町立北小学校教諭

Use of NIE to Improve Curriculum and Instruction in Classroom: Record of Symposium 2010, Itakura-Machi Kita Elementary School in Gunma Prefecture

Jun SHOZAWA¹⁾, Narito ISHIDA²⁾, Shuji SEKIGUCHI³⁾
Katsuyoshi YOSHINARI⁴⁾, Yuki WATANABE⁵⁾

1) Department of Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University, Japan

Chairman of Gunma Conference to Promote NIE

2) Principal of Itakura-Machi Kita Elementary School in Gunma Prefecture

3) Principal of Municipal Higashi-Jujo Elementary School in Kita Ward

4) Representative of the Center to Promote Newspaper Education

5) Faculty of Itakura-Machi Kita Elementary School in Gunma Prefecture

キーワード：NIE、板倉町立北小学校、授業改善、道徳教育、新聞教育、メディア教育

Keywords : NIE, Itakura Town, Curriculum and Instruction, Moral Education, Media Education

(2011年10月31日受理)

目 次

解 説

NIEを道徳に取り入れた「授業改善の取組の概要」

パネルディスカッション

講 評

解 説

1985年に日本に導入されたNIE(教育に新聞を)は、

現在、転機を迎えている。一つには新学習指導要領で新聞活用が明示されたためであるが、もう一つは一部の教師集団の取り組みではなく、校長以下学校が一丸

となって取り組む事例が出始めたためである。本稿は、後者の流れをよく示すものとして、群馬県板倉町立北小学校（以下、板倉北小）が2010年10月26日に実施した公開研究会でのプレゼンテーション、シンポジウム、講評を記録として提示し、NIEの新しい展開を具体的に示そうとするものである。

板倉北小は、2009年度から2011年度にかけて日本新聞協会（当初は日本新聞教育文化財団）のNIE推進校として指定を受け、「授業改善のためのNIE」を標榜して実践を進めており、公開研究会は、同校が2009年度から2010年度にかけて行ってきた実践を発表するものであった。当日のプログラムは、まず^{おび}帯時間を活用した15分間のNIEタイムを全学級で公開し（通常は朝だが、当日は午後実施）、引き続き全学級で新聞を活用した道徳の授業を公開し、そのあと体育館で取り組みの概要をプレゼンテーションで紹介し、続いてシンポジウムを行い、最後に講評を得るというものであった。会場に集まった出席者は約100名であった。

全校を挙げたNIEの取り組みとして知られるのは、2007年度、2008年度にかけて東京都北区立王子第三小学校（以下王三小）が取り組んだNIEの実践であるが、板倉北小が2009年度から始めたNIE実践もまた、石田成人校長のリーダーシップのもとで全校を挙げて

展開したものである。ここでとりあげる内容は、同校の実践の経験を紹介するものであると同時に、日本におけるNIEの最先端を具体的に示すものでもある。その意味では、本稿に収録する内容は、教育方法学の観点からも価値があるものである。

王三小は、実践の成果を2010年1月16日の研究発表会で公開しており、実践紹介のプレゼンテーションを行うとともに、「学校の壁を取り払うNIE」をテーマにシンポジウムを行っている。NIEの取り組みが、教室・学校の壁を取り払い、学校を社会に開かれた存在にしていくという点に焦点を当てて議論が進められた⁽¹⁾。それに対して、板倉北小のシンポジウムは、同校で、特に「道徳」の授業の改善を柱として展開されていた取り組みを中心的な話題としたものであり、パネリストは王三小前校長・関口修司（現・北区立東十条小学校校長）と板倉北小校長・石田成人とで、司会を所澤が行った。講評は、新聞教育支援センター代表の吉成勝好があたった。なお、関口は、NIEが行われていた当時の王三小校長であり、吉成も王三小シンポジウムのパネリストであり、所澤もまた同シンポジウムにおいて司会を務めており、板倉北小のシンポジウムと講評は、王三小での取り組みを熟知した上で行われている。



板倉北小のNIE実践には次の特徴を挙げることができる。それは、(1) 校長が率いて全校を挙げて取り組んでいるということであり、そして、(2) NIEと授業改善が深く結びついていることである。

全校を挙げて取り組むという点については、先行する王三小の実践に匹敵する水準を達成している、と所澤は判断している。具体的には、NIEを同校の教育課程の一部に位置づけていること、特別支援学級を含む全学級でNIEの授業を行っていること、専科教員を含むほとんどすべての教員が実践に取り組んでいること、及び朝の帯^{おび}時間を利用した15分間のNIEタイムを設け、切り抜きや発表など様々な活動を行っていることなどである。それらは、両校に共通した部分であるが、板倉北小は、それらに加え、帯^{おび}時間を利用して同町各小学校で行われている「各学年の主張」の時間に、児童が必ず新聞に基づいて主張を行う、という独自の工夫を行っている。

しかし、両校は、取り組みが同じく全校を挙げたものであったにしても、その間に際立った違いがあった。それは、板倉北小がNIEを、授業改善のための方法と位置づけたことから生まれたものである。同校の教員研修ではNIEを含んだ道徳授業をテーマとして、半年の間に全教員が一人一授業を行う形を取ったのである。そうした点について、プレゼンテーション、及びパネルディスカッションの中で次のことが指摘されている。第一に、教材とする新聞記事に書かれていることは、道徳の副読本と違って、エピソードの取り上げ方が、教師の判断に任されるため、教師は自分自身の判断を重ねながら実践をつくっていくことになる。また、第二に、同じ新聞記事を、違う学年でも活用できるため、学年を越えた教師の協働が促進される。また、所澤の私的な評価による第三点を加えるならば、それらにまして、児童の内的葛藤を生み出す形で新聞記事の内容を活用するという教材観に、両校の授業の質的違いが明瞭に現れている。そうした板倉北小の独自性は、

校長がリーダーシップを発揮したことによって生み出されたものであった。

以上のように板倉北小のNIEの取り組みは、王三小の学校を挙げたNIEの実践から刺激を受けているとともに、著しい独自性をもつものである。なお、所澤は、群馬県NIE推進協議会の会長という立場からも、板倉北小の実践を支援し、王三小の到達した水準を超えることを目指したことを付け加えておく。

最後に全校を挙げたNIEの取り組みという話題について一点だけ触れておきたい。それは、この数年全国各地で「全校を挙げて行われている」、と形容されている実践が増えていることについてである。それらは、板倉北小や王三小と同様の意味で、「全校を挙げて」いるのだろうか。板倉北小の場合、全教員が関わるだけでなく、一年を通した学校経営全体がNIEを軸となされており、それはまた王三小の取り組みでも同様であった。では、他校で「全校を挙げて」という説明がなされている例もそうなのだろうか。実際には両校と違って、学校の根幹に関わる部分にまでNIEを導入した取り組みはなされていないのではないか。両校のNIEの取り組みは、授業の一部や年間の活動の一時期に全校で新聞を取り入れるのとは全く異なり、学校の活動全体、そしてカリキュラムの根幹にNIEを取り込んだのであり、校長の強力なリーダーシップと全教職員の協働、そして保護者の理解なしにはなしえないものなのである。そのような条件を備えて実現した両校の実績を見ると、「全校を挙げて」という形容をなすような学校が、突然次々と生まれてくるような言説には、疑問を差し挟まざるを得ない。逆に言えば、両校の実践の出現こそが、全校を挙げて取り組むというNIEの新しい方向性を示しているのである。

なお、本記録の文字化は、創造学園大学非常勤講師の佐藤久恵が行い、内容は関口、石田、吉成、渡辺、所澤の5名で確認した。

(所澤 記)

NIEを道徳に取り入れた「授業改善の取組の概要」

渡辺祐希 (研修主任)

「NIEを道徳に取り入れた授業改善の取組の概要」についてご説明いたします [パワーポイント画像省略]。

学校紹介と研修テーマ 板倉町立北小学校は、群馬県の南東部に位置し、渡良瀬遊水地を有する自然に恵ま

れた地域にあります。児童数は102名です。概して、素朴で素直と言えると思います。全クラスで7学級で、各学年で1クラス、それに特別支援の学級が1つです。仲はいい一方で、互いに競い合うということは少し苦手です。それから、コミュニケーション能力や表現力の向上なども課題としてきました。

そこで今年度は、児童が自分の考えを持ち、自己表現する力を育てていこうということで、研修テーマを設定しました。その実現にあたり、道徳を中心とした言語活動の使用を工夫しようということで、実践校の指定を受けたNIEを活用して研修を行ってまいりました。

児童の実態 では、次に、NIEに関する児童の実態をご覧いただきます。先月実施した全校児童を対象にしたアンケート結果をご紹介します。まず「新聞を読むのが好きですか」という質問です。「好き、まあ好き、とても好き」を含め、「好き」と捉えている児童は、低[学年]、中[学年]、高[学年]と上がっていくごとに増えています。それから「新聞を読むときに、1回でどのくらいの時間読むか」という質問です。一番多いのは5分未満という子です。中学年になりますと、少し時間が増えて5分程度。高学年になると、多い子は30分程度読んでおり全体の2割弱を占めます。「新聞をいつ読むか?」という質問では、44%の児童が夜読むと答え、また66.4%の児童が家で読むと答えています。「家庭で新聞を購読しているか?」という質問に対しては、購読していると答えた児童は85%に上り、わからないと答えた者は7%です。「どんな新聞を購読しているか?」という質問では、購読している新聞社に多少の片寄りがあることがわかりました。(これは、販売店の偏りから起こっているものだと考えられる。)

次は、1年生から3年生に対する「新聞のどこを見るか?」という質問です。これに対しては、33%が写真・絵・イラストと答えています。次いで漫画が30%、そして、記事ではなく、見出しが22%、そして記事11%と続きます。4年生から6年生に対する「新聞で最初に読むのはどこか?」という質問では、漫画の20%を抜き、事件・事故の記事がいちばん多く、26%に上ります。芸能・テレビが16%、天気予報が7%、それから地域の出来事6%、投稿文6%と続きます。

次に「NIEで楽しいと感じることはどんなことか?」という質問です。これは、学校で行っているNIEの活動

の中から、児童がどの活動が楽しいかを答えています。それによると「興味ある記事を探す」が39%で最も多く、次いで「知らなかったことを知る」が25%、「写真や記事のスクラップをする」が21%、「感想や意見を考えて発表する」が7%、「新聞を話題に人と話す」が6%と続きます。

次に「記事をもとに自分の意見を話したり書いたりできるか?」という質問です。「できる」と答えたのは中学年が最も多いものの、低学年で6割以上、中学年以上では8割を超えています。自分で読んだ記事について、自分の考えを発表できる、またその有用感をもって取り組んでいるということがデータから読み取れるかと思えます。

具体的な取り組み 続いて、NIEと本校の具体的な取り組みについてご説明いたします。「年間指導計画に盛り込んだ実践」「教科指導上の実践」「その他の実践」、そして、今日ご覧になった「道徳での実践」の4つに分けて、ご説明いたします。

まず第1に「年間指導計画に盛り込んだ実践」では「学年の主張」というのがあります。これは朝学習の15分を使って行うもので、月に1回、1学年ずつ、体育館で壇上から全校児童に向けて1人1人が新聞記事をもとにスピーチするというものです。気になった記事をスクラップにして、「僕はこんな記事を見つけました。」「そこからこんな事を感じました。」などといったことを発表します。また、それをフロアで聞いていた児童に感想や意見を求めることも行っています。次に「NIEタイム」です。今日授業を参観される前に、皆さんもご覧になったので、おわかりかと思いますが、普段は朝学習の時間帯で、3週間に一度の頻度で全学年一斉に実施します。廊下には最新の各紙が並べてあります。そして教室には、前日以前の新聞が置かれています。児童は好きな新聞を手に取り、読み、記事を切り取ってスクラップにするという活動を行っています。

第2に「教科指導上の実践」についてご説明いたします。まず、**はがき新聞**や壁新聞です。中学年でははがき新聞を活用し、物語文(文学的文章)を読み、登場人物に向けた手紙を書くことをします。いくつか事例を挙げましょう。この児童[省略]は「お父さんは天国で元気にくらしていますか。私はとても元気です。私はお母さんと2人で助け合って生きていますよ。」と、亡くなった父親に対するメッセージをはが

き新聞で表現しています。また、中学年の実践では、尾瀬の自然体験をはがき新聞の形でまとめるという活動もしました。この児童 [省略] は「バスから降りると尾瀬は涼しく感じます。尾瀬は板倉町と全然ちがって、とても空気がおいしかったです。」と書いています。また高学年の実践では、はがき新聞を活用して、社会の庄内平野の米作りの学習のまとめをしました。この児童 [省略] は「みんなが米を食べないために、減反や減作などの米作りの問題などがあります。」と書いています。その他、高学年の実践では、図書館のお勧めの本をはがき新聞で紹介するという活動を行いました。現在、図書室の前には、そのときに作成したはがき新聞が、紹介している本と一緒に展示されています。この他、高学年の実践として、修学旅行の体験を壁新聞にまとめる活動も行っています。

このように、中学年は手紙や感想、そして高学年といくに従って、学習のまとめとしての新聞制作から、取材をもとにした新聞づくりへと、ステップを設けて実践しています。こうした発達段階に応じた新聞の制作活動を通じて、主観的な記述から客観的な記述へと児童が文章を書けるように指導しています。

教科指導上の他の実践として、要約文や感想文の類が挙げられます。これは、新聞を5W1Hを意識させて読ませたり、新聞の投稿欄などを使って感想文を書かせたりという活動です。いくつか事例を挙げましょう。この児童 [省略] は、9月10日の読売新聞の投稿欄に掲載されていた、万引きを注意したという子についての投稿について感想を書いています。「注意してえらいと思いました。私もあなたみたいになりたいです。」というふうに感想を書いています。そして、その感想に対して教師は「あなたなら注意することができますか？」というふうに、さらに思考を深めさせるようなコメントで切り返しています。もう一つ事例を紹介しましょう。この体育館のステージにあるグランドピアノは、この夏、御年85歳になられる本校の卒業生が寄附してくださったものなのですが、その顛末を投稿として上毛新聞に送った児童がいて、この投稿記事 [省略] はその時の掲載記事です。

教科指導上の実践、次は調べ学習についてです。調べ学習をしようと思ってもすぐに新聞記事として情報を十分に集めることは困難です。そこで、教師が教室に専用のかごを作り、事前に子どもたちと教師で調べ

たいことがらに関連する記事を切り貯めておき、後で貯まった記事の中から有用な情報を探して学習に活用するといった工夫を行っています。

ここまでは教科指導上の実践でも、授業の中での工夫についてのものでしたが、ここからは、授業そのものに関わる実践についてご説明いたします。6年生では国語の討論会をNIEの実践として行いました。討論会は、司会者や書記を含めて児童のみで運営します。実際の例では、6月にあった浜名湖中学生水死事故を取り上げ、新聞記事を使って、友だちが溺れたら自分が溺れる危険を冒してでも助けるべきか、という話題で、肯定グループと否定グループにわかれて主張を展開しあいました。また別の事例では、口蹄疫で殺処分が必要かという問題を取り上げ、児童は「肯定グループ」「否定グループ」そして「聞くグループ」にわかれて討論しました。ちょうど、その授業を授業参観の日に行い、保護者の方も見ていただくようにしました。授業では、肯定グループ、否定グループともにそれぞれの主張を展開し、またそれぞれに質問をしました。回答のあと、聞くグループが、肯定グループと否定グループのどちらの方がより説得力があったかということを最終的に判断しました。この時は、聞くグループが最終判断を協議する間に多少時間がありましたので、司会者や書記がとっさに機転を利かせて議論の流れを復唱したり、保護者にどちらの意見を支持するか挙手を求めたり、という場面も見られました。因みに、この時は、保護者でも意見が分かれ、保護者も児童も、そして授業者であった私も、みな等しく真剣に考えることができた授業となりました。

このように、NIEは答えが一つではないということ、そして答えが一つではないがゆえに、意見を自由に言える雰囲気が形成されやすいこと、それから、教室だけに留まらず、学びを教室の外にまでもち越すことができること、さらにそれがやがては社会に対する関心を高めていくことになる、といった連鎖的なメリットがあるのではないかというふうに感じられます。この授業参観に参加した保護者の1人からは「このように子どもたちが考え、あんなにしっかりした意見を言えることに驚きました。」と感想を寄せていただきました。

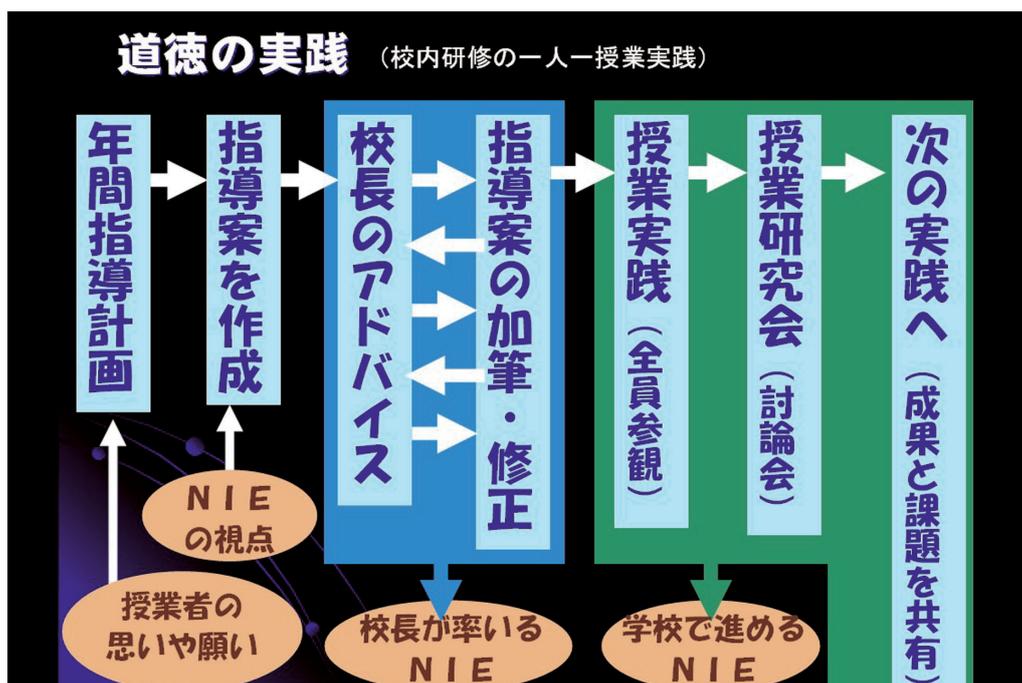
教科指導上の実践、最後はスクラップ新聞です。会場の壁にもたくさん貼ってあるので、ご覧になった方

もいらっしやと思います。いくつか事例をご紹介しますと、チリの落盤事故の全員救出のニュースを切ってきた児童のスクラップ新聞や、小中学生の体力改善の記事を切ってきたものなどです。スクラップ新聞は、各教室の前、廊下側にいつも貼っておりまして、児童が自由に自学年、他学年のスクラップ新聞を見ることができます。それから、児童のスピーチということで、自分で切ってきた記事をクラスの人々に紹介する活動を行ったり、教師からの話として、今日こんなニュースがあった、などというように新聞記事を紹介するという場面もあります。

それでは第三に、「**道徳の実践**」についてご説明いたします。基本的な考え方としては、原則として年間指導計画に従って指導を行います。ただし、新聞を教材として扱うと効果が高いと思われる授業を精選して、年度内で予定している内容項目は変えずに、教材や実施時期を変更していくという考え方で行います。そして、これを校内研修として取り組むことで、それぞれの授業の成果や課題について、学校全体で共有します。道徳で実践をする良さは、何といたっても他の教科と違って単元がなく、1時間完結型だということです。ですから、実践にあたってのスケジュールも組みやすいのです。

それでは、校内研修の1人1授業実践として行う道徳の授業についてご説明します。まず、授業者は児童

に対する思いや願いを実現するための指導案を年間指導計画に沿って作成していきます。その指導案を作る段階で、NIEの視点を盛り込み、新聞記事を取り入れた授業の構想を練ります。そして、そうして作成した指導案を校長に見せ、指導・助言を仰ぎます。さらに、その指導・助言をもとに授業者は指導案を加筆・修正し、それを再び、あるいは納得がいくまで何度でも校長と検討していきます。実際の指導・助言が書かれた指導案をご覧きましょう。[省略] 本校の教師の書いた本時の指導案の右側に、校長のアドバイスがびっしりと書き込まれているのがご覧頂けると思います。こうしたプロセスを経て、指導案ができあがり、授業が実施されます。1人1授業実践では、校内研修ですので毎回全教員が参観し、その日のうちに**授業研究会**が行われます。これは討論会形式で行われます。はじめにパネルディスカッション形式で、校長と教頭が論点を明らかにしながら討論します。そして出された論点に沿って他の先生方が意見を出し合い、さらに話し合いを広げます。記録を担当する先生は、ホワイトボードに討論や話し合いの内容をまとめながら板書します。このようにして行った意見交流によって、次第に成果と課題が明確になります。そしてこれを参加者全員で共有することによって次の実践へ生かしていきます。この授業実践と授業研究会の一連の流れは、どちらも校長が積極的に教員に働きかけ、また新聞を活用



しているなどの点から「校長が率いるNIE」と言えます。また、全体で進めるということで「学校で進めるNIE」という本校の特色ともいえます。

以上が、本校の道徳の授業実践によるNIEの授業改善モデルですが、ここで具体的な事例を一つ挙げたいと思います。道徳の年間指導計画では4年生の9月に「わたしの妹」という副読本の教材による授業が予定されていました。内容項目は「思いやり・親切」です。しかし授業者は、副読本の教材より、もっとその内容項目に迫れるような新聞記事を使って授業ができないだろうかと考えました。そして新聞を見ながら、本で行った授業で使用した「あなたは声をかけますか」という投稿記事を見つけたのです。教材は変更されても、この授業の内容項目は「思いやり・親切」のままです。授業者は、児童の実態、児童の課題をふまえて、どんな記事なら教材として良いのだろうかという意識で新聞を読み、同時に授業そのものの構成も考えながら記事を選んだというわけです。

NIEのよさ さて、こうした実践を行ってきても明らかになってきたNIEの良さということですが、新聞で扱われている社会事象・問題には、唯一の結論がないと

いうことは先ほど申し上げたとおりです。また、そのことで自由な発言を助長している良さや、学んだことを教室の外へ持ち越すこともできるということも、新聞を使うよさの一つだと考えられます。さらに、その他にも良さがあります。新聞は素材ですので、教師が児童の実態にあった授業にするための教材に仕立てる必要があります。しかし、これは見方を変えると、同じ記事を異学年でも使えるという良さとなります。発達段階に応じたNIEを実践的に研究する上で、これは大変有効です。

本校の場合は校長の積極的リーダーシップのもと校内研修が進められ、1人1授業実践や研究会の充実をとおして、NIEの実践が教師の授業力向上につながりました。これは、NIEが“考えられる子ども”を作り出しただけでなく、授業そのものを構想する“考える教員”も作り出したとも言えます。これが、本校の経験したNIEの一番の良さではなかったかと考えています。

以上、本校のNIEを使った道徳の授業実践の概要についてでした。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

【文字化担当 佐藤久恵】

パネルディスカッション

パネリスト 石田成人・関口修司
司 会 所澤 潤

総合司会 (山本金光教頭) それでは、パネリストの先生を紹介したいと思います。はじめに、群馬県のNIEの会長さんであります所澤先生、よろしくお願ひいたします。つづきましてパネリストとして東京都東十条小学校校長関口さん、よろしくお願ひいたします。それから、本校の校長であります石田校長よろしくお願ひいたします。それでは、所澤先生の司会の方で進めていただければと思います。先生、よろしくお願ひします。
所澤 潤 皆さんこんにちは、所澤でございます。群馬県NIE推進協議会の会長を務めさせていただいております。これから、今日のNIEの板倉北小学校で取り組んできた活動をめぐって公開の討論をさせていただきます。では、すわって失礼させていただきます。

まず、何の話からしようかと考えたのですが、今日の公開の授業を見ていて、僕がハッと息を飲んだ場面がありました。ちょうど、六年生の最後の時間のとこ

ろです。六年生の授業、渡辺先生の授業「命のリレー」を授業ご覧になった方も多かったと思いますが、その中で脳死の問題を扱っていました。脳死の人の身体を臓器移植という形で提供するかどうか、自分のことだったら、提供できるかも知れないけど、しかし、自分の家族が死んだときに提供できるだろうか？ とか、そのような形でいろんな議論をしていたんですね。そして、議論が進んでいって新聞の投書を次々に紹介していきました。最後に、——最後だと思ったんですが、中学校2年生の子供が書いた投書で「とても難しい」という、自分の迷った気持ちを書いた投書を読み上げたんですね。そして、渡辺先生は、「中学校2年生でも難しいんだから、小学校の6年生だったら、やっぱりいろいろ考えるだろうね。これから、今日のことをきっかけにしていろいろ考えましょう」という話をしました。そして、それで終わるのかなと思ったら、

その次にですね、今日の『上毛新聞』の記事を出したんです。小学校6年生の女兒が自殺したという記事をパッと出したんですね。その記事は子どもたちには配らなかつたんですが、先生が「この記事を読んだ子がいるか？」って聞きました。4、5人手を上げたと思います。それから、朝のニュースを見たという子が何人かいました。「脳死で臓器移植、そうして臓器を提供するかどうか、こんなにみんな考えているのに、一方で自殺をする子がいるんだ」ということを授業の中で出したんです。僕はその時に、ハッと息を飲むような感じでした。子供達もとてもびっくりしたと思います。

しかし、それで、脳死をした人の臓器を提供できるかどうか、家族の臓器を提供できるかどうかという話が、「自分たちには、なかなか考えられないな」というぐらいのところでおさまらずに、もっと大きな問題、自分の命を、人の命をどう考えるかという問題と結びついたと思うんですね。6年生は今日のたった1時間ですごいことを勉強したんだな、参加した我々もものすごい勉強をさせてもらったんだなという感じでした。他のクラスでもいろいろなことがあったんじゃないかなと思うんですが、まず、そのことを最初に話させていただきました。6年生のその場面が今日のNIEの道徳の実践発表会の性格、非常に大きな価値を表しているんじゃないか、というふうに今、思っています。

さて、今日は、そういう板倉北小学校が学校をあげて取り組んだことで、見えてきたNIEの魅力、可能性、課題といったようなものを考え、パネルディスカッションの形で考えてみたいと思っています。

今回の板倉北小学校のNIE実践の特徴は、「校長が率い、全校で取り組む」ということだと、先ほど渡辺先生がおっしゃっていましたが、今日は、そのことを考えてみたいと思っています。今年の7月に熊本県でNIEの全国大会がありました。過去3年くらい参加しているんですが、そのときに、ちょっと例年と違うなと思ったことは、「学校を挙げて取り組んでいます。学校ぐるみで取り組んでいます」というようなお話がいくつもあったのですね、しかし、「学校を挙げて取り組んでいるとか、学校行事で取り組んでいる」は、本当はどんな意味なんだろうか。校長先生が代表になって、グループを組んでいるだけではやっぱり学校を挙げて取り組んでいる、学校ぐるみで取り組んでいるとは、

多分、言えないと思うんです。今日こちらに来ていただいている関口修司先生なんですが、関口修司先生は、NIEの関係者ではご存知の方も非常に多いと思いますけれども、昨年3月まで、東京都北区の王子第三小学校というところで学校を挙げたNIEに取り組んでいらっやいました。そこで、石田先生と関口先生のお2人で学校を挙げて取り組むということはどんなことなのだろう、どんなことを実際にやっているのだろうと、そういう、実際の活動の中に入り込んだ話を、していただくというふうに考えています。

NIEについて、まだよくご存知でない方もいると思いますので、少しだけ説明させていただきます。学習指導要領に入ってくるということで新聞活用が非常に話題になっているわけですが、NIEは現在の学習指導要領に入ってくる内容よりも、いろんな豊かなものがあるというふうに私は思っていますし、NIEの関係者の人たちもみなそう思っていると思います。

活動は現在、簡単に整理すると3つになると思うんですが、「新聞の機能を学ぶ」、それから「新聞を製作する」「新聞を活用する」というようなそういう3つの学習があると言われていています。それぞれ「新聞を学ぶ」「新聞に学ぶ」「新聞で学ぶ」。「を」「に」「で」と言われているんですが、「新聞を学ぶ」ということは新聞というのはいったいどんなメディアなのかということを知ることです。また、新聞社に行ってみたり、新聞記者の取材の話を聞いてみたりすることです。「新聞に学ぶ」ということは、新聞を自分たちで作ってみる、つくるということによって自分たちの表現活動を充実させていく、——もちろん他のものも充実すると思います。「新聞で学ぶ」、これは、新聞を読んだり、——読むだけではありませんね、切ったり、それから投書してみたり、さまざま形で新聞を活用する、そういう「新聞で学ぶ」という活動です。今日の発表会では、新聞活用学習に焦点があたっていると思いますが、学校としては実はかなりいろいろなことに取り組んでいると思います。

もう一つ、最初につけ加えておきますとですね。NIE活動も日本で20年以上行われています。欧米でも行われているわけですが、しかし、諸国に比べると日本は、盛り上がっていないというふうにも言われています。取り組みに二の足を踏む方も非常に多いということで、それはどうしてなんだろうということなんですが、

どうやら、NIE自体がとても面倒くさいような、ただでさえ忙しい学校がますます忙しくなってしまう、——なんとなくそういうような気持ちを持ってらっしゃる先生方が多いかららしいんですね。

今日は、——NIEは簡単だとは言いませんが、しかし、多少面倒くさくても、それにまさる価値があるということを、是非皆さんに理解してもらいたいというふうに考えます。その価値とは、子供たちに思考力が育ち、判断力が育ち、そして社会を見る目が育つ。簡単に言えば、そんなふうに整理で来ると思うんです。少し、それに加えると、NIEというのは、教科横断的な活動なんです。例えば、小学校で研究指定校のテーマとして選ぶときに、道徳を選ぶ学校が多いと思うんですが、各先生方の専門とは離れた形で、みんなで共通に議論しやすいテーマとして道徳が選ばれていることが多いと思います。NIEも実は、そういうような性格もっています。どの教科でもNIEは成り立つわけです。学習指導要領を調べたところでは、音楽、美術、図画工作なんかに新聞活用は入っていないようですが、しかし、実際にNIE活動はすべての教科について行うことができます。これは中学校で実践を行う場合も全く同じではないかというふうに思われます。

今回は、道徳に限定してはいますけれども、いろんな形で学校全体に広がりをもち、さらには、さっきお話がありました保護者の方にも広がっていくようなそういう力強さというものもあるのだというふうに思います。さて、前置きはこのくらいにして、まず、関口先生に、今まで自分自身で専門的に、——NIE活動に非常に力を入れて取り組んできた立場から、今日の実践、今日の授業公開、それで学校で行っていることをどうみたかということからお話を伺えればと思います。

関口修司 東京の北区立東十条小学校の校長の関口と申します。NIEに関わってかれこれ20年くらいになるのでしょうか。1人でNIEをクラスでやっていました。子供が伸びていくのが手に取るようにわかりました。ですけれども、だいたい1年間か2年間でその子を手放すことになります。そうするといつのまにか、もどってしまうというか、うずもれてしまうというか、それがすごく悔しかったです。いつか、校長になったら組織でやってみたいなと思っていて、今、所澤先生から紹介されたように、学校組織でNIEをやったということなんですが、その関係で、「専門的な」ということで

すけれども、NIEに専門というのではないのだと思うんです。それぞれの発想で自由にできる、——いろんな工夫ができるのがNIEだと思います。今日の授業の中でもその工夫がすごくそれぞれの先生の中で生きていたなということを痛感しました。

まずですね、最初に言っておきたいことがあります。先日NHKのテレビで、ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、東大の安田講堂でハーバード大学のマイケル・サンデル教授が、白熱教室というので、Justice—正義について討論型の講義をやったのをご覧になった方もいらっしゃるんじゃないかなと思うんです。その白熱教室の番組で、マイケル・サンデル教授の講義が話題になったんです。こんなすばらしい講義はないということで、いろんなところでもはやされています。私はそれを見て、がっかりしました。こんな小学校でやっているよ。かわいそうに、あそこにいる人たちはほとんどこういう授業を受けて来っていないんだなと思いました。小学校でNIEで授業をやっていたら白熱教室になるんです。ほとんどの人たちは、そういう経験をしていないで育ってきているんだなと、つくづく思いました。ですから、きっと北小学校の子供達は自分の意見を本当にいろんな方向から考えて言える子供達になるし、教室の中で常に白熱した議論を戦わせることができるんじゃないかなと思いました。

感想ですが、まず最初にNIEタイム。5年生、6年生、たった15分の中でほんとに新聞を開くところからはじまりました。僕はこれがやはり理想だと思っています。できれば1年生から、特別支援学級の子供も15分のスタートから、最初に新聞に出会うところから。しかし、最初は時間的に無理かもしれません。確かに厳しいんですが、私の経験では、3ヶ月間毎週1回ずつやっていくとだいたいの子が15分間でコメントを書き上げるようになります。これは繰り返しの成果だと思います。ぜひ、北小学校でも、さらに続けていって子供たちが育ってほしいなと思います。

そうはいつでも、今日のNIEタイムは工夫されていますよね。その発達段階において、いろんな工夫がありました。それから、子供達もちゃんとわかっていますよね。低学年の子供達は、主に写真。中学年の子供達はやはり写真と見出しに注目してコメントを書いているのが多かったです。5、6年生になると環境問題ですとか、政治の問題ですとか、記事を読み込んで、

そしてほんとに自分の意見を書いている、ほんとにすばらしいものだなと思いました。また、ワークシートに先生方がコメントを書いているのがすばらしいと思いました。残念ながら私の学校では1人1人コメントを書かせませんでした。なぜか？ たいへんだからです。1学級、35人から40人いました。毎週やって、ほかの授業もやって、それでNIEタイムでいっぱいコメントを書きなさいと校長が言うと、みんながいやだと思います。アンダーラインだけでいい、マルだけでいい、「見たよ」、「good」でも、それでいいから子供達にすぐワークシートを返してあげてっていうようなことで、——特に若い先生が多かったので、そのようにやって、続けました。すると確実に定着していくところがわかりました。多少クラスによっても回数が違ったり、開始時期が違ったりしているんだと思いますが、やはり、何回も繰り返しているクラスの子供達は、確実に文字数がまず多くなります。書いていることも深くなります。是非これからも続けていただきたいなと思っています。

ただ、残念だったのは、できれば新聞名は必ず書かせるといいと思います。新聞名何月何日、そういうのを常に書かせておくと、違うところで生きてきます。例えば社会科で調べ学習をやれば、必ず出典を明らかにして書きます。著作権の問題も含めまして、そういうところを自然に身につけさせるといいなと思いました。

それから、長くなりましたが、授業についてですけど、一クラスずつのことは申し上げられませんので、全体で言います。非常に先生方がみなさん、失礼な言い方かも知れませんが、指導技術の基礎基本がしっかり身につけているなと思いました。それだけじゃなくて、そのうえで、とても1人1人の先生が新聞記事を授業用に料理している、工夫して授業をつくっている。そんな印象がありました。学校全体としての先生方の力が向上しているなということがわかりました。

それから、子供達ですけれど、新聞を使ってやっていますので、常に事実認識をもとに思考している。そして自分の身の回りで起こること、また、いつか自分にふりかかってくることを真剣に自分の身に引き寄せて考えていた。そんな印象があります。ですから、やはりNIEで道徳をやることは、すごく意味があること

なんだろうなということを、まず、感じさせていただきました。何にしてもやはり新聞を資料として使うということの意味を実感したということです。すみません、長くなって。私からは、以上です。

所澤 それでは石田先生、今のコメントに対して、先生の方で感じられたことを。特に、組織という点では関口先生、あまりおっしゃらなかったんですが、その点についてもちょっと加えて話していただけたらいいかなと思います。

石田成人 まず、さきほど、研修主任のほうからも話がありましたように、私に関わるができる場所というのは、学習指導案の作成というところだと思います。そここのところで、先生方のいろいろな願いとか、思いとかそういうものをよく伺いながら、私が指導するとか、支援するとかということではなくて、私も自分が授業をするようなつもりになって、先生方と一緒に考えていくという、そういう考え方で、一緒に指導案をつくっていくということを積み重ねてきました。

先ほど、新聞の3つの機能みたいなのが出されました。本校では特に、新聞で学ぶということで、新聞というのが素材だというふうに私は理解しております。この素材に息を吹き込んで教材としていくのは先生方だと思うんですね。それから、先生方のその素材を見たときに、自分ならどんなふうに料理をしていこうかという、そういう楽しみみたいなのがあるんですね。そのアドバイザーというか、一緒になって考えていくのが自分の仕事なのかなというふうに思っています。

新聞を取り入れるというと、「新聞作らなくっちゃならないんか……スクラップやらなくちゃなんねんか……ああ、めんどくせえ」と、私も教員の時だったら、きっとそう思いました。だから私はやはり、まず最初に先生方が一番望んでいること、——授業改善でいこうと考えたんです。それを望まない先生は誰一人いないと思います。これをまず、やっていって、そうしますと派生的に、切り抜きのことも出てくるでしょう、それから、新聞を作らなきゃいけないということも出てくる。そういう考え方でやってきました。それから、強制と強要というのは私が大嫌いなことばですので、これはもう極力止めて、先生方に、自分でいいと思えるからやるという、そういう伸びやかな中で

きるようなそういう環境を作るようにして、私は今まで先生方との間でやってきたつもりでおります。いつも、特に組織、組織というのはあまり意識しないで、みんなでやっていけばいいんじゃないかなということ、積み重ねてやってきました。あとは、先ほど、研修主任の方から、宮崎県の口蹄疫の件が、所澤先生、出ていたわけなんですけど、(所澤 はいはい。)今日は、保護者の方も6年生で岸本さんと大野さんとお見えになっていますので、もし、できれば、そういったことも含めて、子供達がどういうふうにくらか変わってきたところがあるのかというお話をフロアの方におろしてもよろしいんじゃないかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

所澤 それではですね、6年生の保護者の方に、ちょっとマイクを回していただけるでしょうか。すみません、岸本さんと大野さんでよろしいですか。

保護者(ふたり) はい、そうです。

所澤 今回、新聞活動、NIE活動に取り組みはじめて、保護者の方の目から見たときに、どういうふうに感じられたか。それから、授業を参観されてどう感じられたかということを中心にお話いただければありがたいです。

保護者(岸本志子) まず、NIEということで去年の時と比べて、新聞を読むようになったなというのも一つなんですけれど、ふだん使っていない難しい言葉とか、政治の話とか、経済の話とか、科学の話とか、多分、本人は理解しているかどうかわからないですけど、そういう難しい言葉がけっこう出てきているので、今年2年目になって、親としてはとてもびっくりする部分もありました。

所澤 どうもありがとうございます。大野さんいかがでしょうか、その点。

保護者(大野美由紀) はい、私も新聞を取り入れての学習ということで、はじめは、読む力——読解力がつくのかなと思っていましたんですけども、実際は読解力よりも、発言力、発表力、言語力が身についたのかなと思います。男子の母なんですけれども、そろそろ、家庭で口数が少なくなりまして心配してはいたんですけども、NIEの活動がはじまってから、「お母さんこれどう思う？」というような質問が家庭内ですごく増えてまいりました。渡辺先生が1学期に行ってくださいった授業参観のときも、口蹄疫の殺処分についても、前

日、前々日からかなり息子から質問をされまして、私自身もたじたじになるところもあったんです。ディベートの形をとった授業も、ほんとにすごく充実していて、小学生のディベートの授業をはじめてみたんですけども、みんな人の意見をちゃんと聞ける、それで、突っ込まれたときのために根拠のある言葉を自分で言えるということで、保護者、親の目からたいへん頼もしく思いました、新聞効果とはこういうものかと実感いたしました。

所澤 ありがとうございます。お子さん、学校に行くの楽しそうになったんじゃないでしょうか？ もともと楽しかったかも知れないけれど、ちょっと違う形でそういうところあるんじゃないかと思うんですが、そのへんいかがでしょうか。

保護者(岸本) 今日は、先生方の数がたいへん多くてうちの娘は萎縮してあまり授業中しゃべっていませんでしたし、今日、このことについて、友だちの何々くんに聞いてみるなんていうこともたびたびありまして、たいへんうれしく思っています。

所澤 どうもありがとうございました。それでは、また、こちらにマイクをもどしますが、関口先生、石田先生の学校の組織を挙げて取り組むという点について、お気づきの点をちょっとおっしゃっていただけるでしょうか？

関口 やはりNIEは、私も個人でやっていたのですが、NIEは個人でやるという先生が多いと思います。教材をつくったり、そして研究授業の中で教材をどんどん生かしていったり、するようなことはしているんですが、そこで、止まってしまうんですね。今日この北小学校を見て、先生方が本当に足並みを揃えて、新聞を使っているというところ、特に道徳というところで、新聞を使っているということには敬意を表したいなと思いますし、さらにただ単に道徳だけではなくてそれ以外で、はがき新聞や、新聞づくり、そしてスクラップ新聞と言ってましたけれども、実際、新聞スクラップなども定期的にやられているということで、非常にバランスよく組織としてNIEをやっている。それで、さっきのお話にもありましたように、先生方の力量も確実に上がるとは思いますし、子供達は確実に成長するんじゃないかなと思っています。

ただ、先生方は、もちろん鍛えれば鍛えるほど力量

が上がるんでしょうけれど、これもさっき話にでたように、本当に多忙の中で先生たちが、どこまでやれるか。結局腰が引けてしまって、NIEを、食わず嫌いというのか、やらない先生がほとんどになってしまうのだと思うんですね。そこで、石田先生がリーダーシップをとって「やってみようよ」ということによって、子供が育つを見て、やはり先生たちは喜びを感じ、そして、先生たちも育っていくのではないかな、私の経験も含めてそれをすごく感じたところです。

それから、石田先生も、そんなに大きい規模の学校では——私のところもそうですが——ないけれども、先生たちと一緒に足並みを揃えていくことには、きっと、かなり指導力なり、いろんな工夫や努力があったんじゃないかな、ということは、感じるところです。

所澤 どうもありがとうございます。杉戸先生、いらっしやいましたら、——今日、特別支援学級担当された……。いらっしやいますか、杉戸先生今年、転任されていらっしたばかりだと思うんですが、今の新しい活動がとても大変だったのではないかなと思うんですけども、杉戸先生が今日の授業でおもいきり取り組まれたきっかけとか、そういう点をお話いただけるとありがたいのですが、どうでしょうか。

杉戸敬治 私のところでは、通常は5年生の子供が1人なんですけれども、道徳は、いっしょに協力学級という形でみんなの中に入って授業をしています。今日の場合は、そこから、また1人にもどって1対1という形で道徳をやりました。1対1ですと、いろいろな子供達の意見というのが出ないわけで、そのところをどういうふうに補いながら進めるかが難しい点でした。今日の場合、男の子なんですけれども、言わせながら、いろいろ考えさせながら、本人の今まで気づかなかった部分、新しい考え方、自分の気づき、そのへんを少しでも、深められるような形でもっていくようにしていたんですけども、やはり、1対1というのは難しいなというのが、実感ではありました。ただ、今日は、彼は、わりと意見もどんどん出ていたかな、彼なりにがんばる部分ができただけかな、というふうには思いましたが、難しい部分も、反省点もいろいろありましたが、以上です。

所澤 どうもありがとうございました。今年、こちらの学校に転勤していらして、授業研究会のやり方、——1人1授業ということで授業をやったあとに、さらに

授業研究会もあるわけですが、授業研究会のスタイルが随分、今までの経験と違うのではないかなというふうに思うんですけど、そのへんは、いかがでしたか。びっくりされましたか？

杉戸 そうですね。1人1授業のあとの授業研究に、討論形式ということで校長先生が入りまして、道徳主任と掛け合いをしながら進めていくわけですけども、今までこんな進め方があるのかなと、はじめてのスタイルでしたので、こういう形もあるんだというふうにびっくりしました。いろんな方の授業もまた見ながら、1人1授業をやっていくなかで、——自分だけじゃなくて、一步高いところから見て、こういうふうな見方もあるんだということが、授業研究を通して感じられたということが、非常に刺激になりました。それは、自分の授業スタイルの改善に、少しずつ入っていくような形でした。こちらにきて、新しい発見だったなというふうに思います。

所澤 どうもありがとうございました。関口先生は東京でいろいろ授業研究会に参加されていると思うんですが、珍しいスタイルだと思うんです。関口先生、感じられたことを。

関口 ほんとうに、校長さんが前に出て、討論形式でやっていくという進め方はびっくりしました、——私は、そこまでの自信がないなと思って。

ただ、組織としてやるにあたって、例えば、偉い講師の先生をお呼びして、理論を難しくお話をされても、きちっとスタートが切れないんですね。このNIEのおもしろいところは、私が以前、王子第三小学校でやったこと、今の東十条小学校でもやっているんですけども、多分、板倉北小学校さんでもやっているんだと思うんですけども、そのスタートを研修会のような形で切ることができる。私の学校も、北小さんもそうですね、今日お越しいただいて、最後にまとめて下さる吉成先生に学校は来ていただきまして、先生方に、直接新聞作りや新聞スクラップをさせて、まさに実技研修をしました。1年間の前半は、とにかく新聞スクラップの仕方を身につける、または、新聞作りの仕方を身につけるということでした。やったことないとしても一步踏み出させませんけれど、やってみて、先生方同士で関わりながら、ああでもない、こうでもないという試行錯誤しながら、おもしろおかしく研修を進めていくうちに、「よし、これ、子供達に使ってあげよう」

という気持ちになってきて、そういうところから、私もスタートしましたし、多分、北小さんもスタートされたんだと思います。それが一つの組織として動かさきっかけになったかなと私なんかは思います。

所澤 石田先生、今の点について、何か補足というかありましたら、お願いします。

石田 おかげさまで本校の方も、指定を受けて2年間のうちに、吉成先生に2回来ていただきました。今、関口先生がおっしゃったように、私も同感で、あんまり最初から小難しいような、こうである、ああである——概念規定ですよ、意味づけのようなものを伺うと、ええ一つ、ということになります。吉成先生の場合には、非常に実務的といいますか、最初からいろんな意味で、こういうことをやるといいよ、それがすぐに、明日から使えるようなそういったものがたくさん提示されまして、そして、先生方も、子供ようになって、その切ったり貼ったりする作業に一生懸命取り組みました。本当にいいスタートを切れたんじゃないかなというふうに、よい基礎固めといいますか、そういうことをやっていただけたんじゃないかな、というふうに思います。そんなところが、私の感想です。

所澤 石田先生、今、1人1授業の話も出ていますが、先生が道徳に取り組もうとしたきっかけはどこにあったでしょう。

石田 いの一番に言えることなんですけれど、こちらにご参会の先生方、道徳をやってきてどうですか？私は、副読本を否定するつもりは、まったくありませんけれど、非常に読書量の多い子供、それから、知的水準の高い子供は一読すると、授業でどういうことを言えば、先生が喜ぶのかとか、という部分まで、瞬時にわかってしまいます。そういう構造になってますね。それと、もう一つはこうあらねばならぬ、そして、こういうふうに、なんなくはいけないよと、そういうものがつくりられている。そういうことが非常に鼻をつくことがある。私は、やはりそういうところが気になっています。今回新聞を取り入れると、そういう答えがないんですね。それに教師用指導書のような赤刷もあります。だから、「さあどうしよう」、それを考えるのが先生方になると思います。そういう意味でも、まず、副読本の息の詰まるようなそういうものから解放されて、伸びやかな授業ができる、そういうふうに思いました。

それから当然、今度は授業の展開に至っても、非常に多様な見方考え方というのが子供の中から出されます。そういったものをこれから、先生の方が、交通整理をする。本校では3方向KR（注 教育工学の3方向コミュニケーションの理論。）ということで発問をして、子供からもどってきて、そのもどってきた答えに対して、どういうふうに子供に次に返してやるのか（注この部分をKRという）、そういうところを中心にやってきているわけなんです。授業改善といってもその3方向KRにスポットをあてている。発問しない教師はいませんので、そのKRをポイントとしてやっています。

新聞の記事の多様性のよさということですが、特に投稿の欄は、いろんな人がひとつのことについて意見を言います。当然投稿した人がいます。その投稿に関わる投稿がある。3人くらいいるんですね。だから、その3人を追っていかなければならない。例えば、電車に乗っているときに、座席のところに年寄りが来たときにどうするかという、そのことについても、今日、関根（寿美）教諭がやっていた授業では、投稿を2本使っていたわけですね。ただ、単なる1本の投稿ではなく、2本使って授業を進め、なおかつ終末のところで、まとめのために必要だということで、もう1本また使っている。そういう非常に多様性のある道徳の授業ができるということですね。ですから、道徳的な実践力ということでは、いかに自分は生きるべきかということが最終的なものなんでしょうけれど、そういったところ、靴の上から足をかいているような感じではなくて、常にダイレクトに、そして子供がほんとうにできるかどうかという、そういうところの勝負ができるようなものが新聞の記事の中には多く入っていると思います。以上です。

所澤 僕は、最初に道徳を取り上げるのは、いろんな先生に参加しやすいからだというようなことを言ったんですが、石田先生のお話を聞いていると、僕の考えはちょっと当てはまらないかと、——そういうレベルのことではなくて、もっと遠大な考えのもとに、今回の道徳をテーマにするというNIE活動がはじまっているということが、今、確認できたと思います。

さて、そこでですね、今日、1年生の授業のTTに入っていたらっしゃいました阿部先生、——教務主任でいらっしゃいますが、阿部先生のほうからですね、投書

欄の利用、今日、今も投書のお話が出てきたんですが、道徳の授業と投書欄の利用ということについて、そして、教務主任の仕事との関連でお話いただけるとありがたいんですけど。

阿部恵光 はい、教務主任の阿部です。投稿の欄を使うということですが、自分なんかは、新聞にプラスして、インターネットをよくつかうことです。検索エンジンで、何かをやりたいなというときには、必ず検索をしています。新聞の方も、そういう形で意識を高めて見ていくということになります。教務主任ですので、他の記事があったら、先生方に「こういう記事があるよ」ということを教える情報提供という形で行っています。先生方が狙っているものについて、合ったような情報提供をするということで今のところやっているんですけど。

所澤 今の、「それぞれの先生に情報が提供できる」というのは、非常におもしろい点だと思うんですね。つまり、ふつうですと、各学年、全部違う教科書をつかっていますのでそれぞれの先生に、独自の情報を提供するってけっこうたいへんだと思うんですが、NIE活動という形で通していくと、各学年で同じ教材を使えたりする。さきほど、保護者の方もおっしゃっていましたが、保護者も同じ教材、つまり記事を見ているんですね。ですから、6年生も5年生も4年生も、もしかしたら同じ新聞記事を通して、お父さんお母さんを含めて、いっしょに話ができる。そんなようなよさというのもあったんじゃないかと思うんですが、いかがですか、その点は。

阿部 みなさんお持ちだと思いますが、実践事例集⁽²⁾の中に、5年生、6年生というか、自分が授業したのもあるんですが、それを森川(薫)先生が、2年生のほうで、もう一度同じ教材使って授業をやってます。それをちょっとのぞいていただけるとわかると思うんですが、同じ教材でも学年が違ってもその見方も変わるなあというのがあって、また、教師の視点も変わっていきますので、そのあたりがかなりおもしろいかなというのがあります。

所澤 どうもありがとうございます。道徳について、いろいろおもしろいポイントがあると思うんですが、今日、フロアでいらしてる方で、道徳教育にお詳しい方が何人かいらっしゃるようなので、最初に館林六小の奥澤京子教頭先生いらっしゃいますか？ もしいらっ

しやったら、今日の授業について感じたことをおっしゃっていただけるとありがたいのですが。

奥澤京子 道徳には詳しくありませんけれども、館林第六小学校の奥沢です。今日は授業ありがとうございました。勉強になりました。この間、新聞に生品中^{いくしな}の方でやはりこのような新聞を取り上げての授業公開があったということで、本校では3名が来ているんですけども、やはり新聞を使ってどのような授業が展開されるのだろうかということで、今日見させていただきました。先ほど、パネリストの関口先生がおっしゃいましたように、子供達がしっかり自分の考えをもって発言をしているということ、そして、道徳の授業の中に――4年生の授業だったのでですけども、この一時間の中に、ディベートも入っていたり、また、ともかく、子供1人1人の考えをほんとうによく先生が、引き出しているということを感じました。今日、はじめてみた授業でしたので、また、自分の中で勉強して何らかの形で少しでもおろせたらなあと考えているんですが、今のところ、ここまでの感想ですが、ほんとうに勉強になりました。ありがとうございました。

所澤 どうもありがとうございました。NIEの活動が広がっていく可能性を感じてとてもうれしく感じているんですが、もう1人、南小学校の小林教頭先生、いらっしゃるでしょうか。いかがでしょう？

小林民功 板倉南小学校の小林です。今日はお世話になります。授業を見させていただいて、私も、今年の3月31日まで本校におりましたので、関わりがあったんですけども、やはり新聞を使っていろんな情報を入れるということは、いろんな見方ができるということが一つ、大きくあると思うんです。特に、今回は投稿欄をつかったということで、多くの人たちの意見というのが直接的に子供達の考えを揺さぶるというか、そういうふうな形になっていたのかなと思います。道徳の副読本ですと、なかなか絵空事のようなこともありますが、現実社会で起こっているということが直接的に学校の授業に入ってくることで、興味深くできるのかなと思います。いろんな意見が聞けるということで民主主義とか、そういう意識という点も子供達の中に少しずつでも広がっていくのかなと感じました。昨年度から比べて、NIEの活動というのが、非常に深まり高まっているんだなというふうに感じました。ありがとうございました。

所澤 どうもありがとうございました。もう一方、西小学校の武井校長先生、一昨年は板倉東小学校で道徳実践の研究会に、私も参加させていただいたんですが、そのときのことからも含めてぜひ、簡単をお願いします。

武井 淳 はい、板倉西小学校の武井淳と申します。今日はありがとうございます。いろいろな廊下の掲示物等を見て、ハッと思ったんですけれども、まず、子供達が新聞に出ている事実認識というか、それが非常にしっかりできていると。こういう事実に対して自分はこう考える。簡単にいうと2段階、——もっと段階があるかもしれませんけれども、そういった事実認識をしっかりしたあとで、自分の考えをまとめていくという力が確実に、毎日の実践の中でついてきているかなというふうに思いました。それから、6年生の道徳の授業を見せていただいたんですけれども、新聞記事の使い方にしても、ただ単に導入だけの資料ということではなくて、展開にそっていろいろ関連づけて、もう一度その記事にもどって考える、そういう使い方もすばらしいと思いましたし、なんと言っても、子供達が脳死とか、臓器提供とか、そういうことに対して、自分の言葉で考えを述べている、——子供なりの言葉というんですかね、必ずしもそれがきれいな言葉ではないかもしれないですけども、そこがとてもよかったなと思えました。ありがとうございました。

所澤 どうもありがとうございました。関口先生、今の皆さんのお話を聞いて道徳の授業、——副読本のあり方とかについて一言いっていただければと。

関口 はい。やはり、現実の世界に子供達は生きているわけですよね。現実の世界の中で道徳的な判断をして行動する。その子供達を育てていかなければいけないわけですから、副読本を否定するつもりはまったくありませんけれども、やはり、道徳で新聞記事を使うということにはかなり意味があるのではないかなと思えました。

ただ、先ほどから、楽に楽にと、私は言っているのですが、例えば、先生たちに毎時間毎時間新聞記事を使って授業をやってほしいなんていうと、それはそれはたいへんですし、それは正直言って無理でしょう。ということを見ると、道徳副読本には、内容項目が明確になっているということがあるわけですから、それを利用する。指導計画の中では、内容項目をある程

度網羅できるように、きちんと位置づける、——きっとそれも北小学校さんもやってらっしゃるんだと思います。副読本も使いながら、一方で今の世の中を新聞記事の中から見せて、道徳として考えさせていくというふうに組み合わせていくことが大切なのかなと思います。特に、低学年、中学年、高学年にいくにしたがって、要するに高学年になればなるほど、現実の世の中というものをきちっと学ばせなければいけないんじゃないかなと思いますし、それに対する子供たちの知的好奇心もとても高いと思います。ですので、やはり割合からすれば、当然高学年になるにしたがって、新聞記事を道徳の中で使う割合を増やしていく、——そういうふうにしていけば、副読本の意味合いも押さえながら、現実の中で道徳的实践力もはぐくむことができるんじゃないかな、私そのように考えます。

所澤 だんだんと終わりの時間も近づいてきておりますので、ここで、茨城県のNIE推進協議会の事務局の儘田先生に一言お願いしたいんですが、今までのお話と、それからさらにNIEのこの活動をどうやって継続していくかというような視点を含めて一言お話いただけるとありがたいのですが。

儘田茂樹(茨城新聞社NIE事務局) 茨城県水戸から来ました。今日の授業、すごい、すばらしい、うらやましい、すばらしい、うらやましい、——うらやましいのと感じたのは、校長先生のリーダーシップと学級担任の立場から先生たちが団結したその結果というふうに感じました。今、司会の先生からあたえられたことですが、今までNIEは声高に叫ばれていたんですが、あまり、高まってはいなかった。私は、その原因は4つあると思うんです。1つは、学習指導要領になかった。ずばり言いますと、なかった。今までやってきたのは、「新聞の鬼」と言われてきた先生たちが、点としてやってきた、というふうなことだったろうと思います。職員室で新聞を見て教材研究をやるよりも、コンピューターのインターネット見たほうがあの先生仕事をしているというふうな見方もされているようでもありました。それから、2つめは、要は、情報教育時代で、新聞の情報よりも、コンピュータを使うための教具というふうなものが主流になってきた。ソフトがいろいろ改善され、開発されて、そちらのほうに——失礼な言い方ですが、飛びつく人がいたんです。それから、3つめは時間がかかる。今、道徳の副読本

で例を上げますと、副読本を見れば、どれを選べばいいかなとすぐに教材がわかるが、新聞からこの授業に関する教材をみつけるとなるとすごい時間がかかるんです。なかなか取り組めない。それから、4つめは管理職の校長、教頭先生に、——失礼な言い方ですが、あまり理解の深い管理職がいなかった。石田校長先生のような校長先生だったら、拡がるんでしょうけれども、なかなかみつからない。そういう4つがあるんだろうなと思いましたが、今、その4つについて時代が変わりまして、価値観なども変わってきていて、新しい学習指導要領にたくさん例示として出てきています。ですから、いろいろな面で、これからはやりやすいというふうに思います。その追い風を受けて、これからNIEを意識して進めていくべきだろう、これから、もうどんどんというような感じを持っています。期待しております。

所澤 どうもありがとうございます。期待が非常に大きい石田先生ですが、石田先生、僕も、石田先生に、ここで終わりにしないで、2年目で終わりにしないでもっと続けていただきたいと今、実は思っているところなんです。

それはそれとして、今日は新聞社の方もいらしているんですが、毎日新聞の滝野さんがいらっしゃいます。以前、前橋で群馬の支局長をされていたとき、3年ほど前に、NIEの担当をさせていただきました、いろいろご意見をいただいていたんです。今日は久しぶりにこちらの学校にいらして、いろいろ感じたことがあると思うんですが、ちょっとお話願えるとありがたいなと思います。

滝野隆浩 毎日新聞の社会部で今編集委員をやっている滝野といいます。校長から「来ないとうなるかわかっているんだろうな」と言われて、「はい、わかりました」と今日は来ました。日々、記事を作ってる、新聞を出す側の人間としては、ここまで、読まれ、切り刻まれ使われているというのを今日、見させてもらって、非常にうれしいなと思いました。それが一つ。小学生の読む姿が堂々としている姿が、これはいいなと、——大人顔負け、新聞をこなしたり、こなしたり、新聞を戻したり、いろいろやっているというのは、使ってもらっているんだなというのは、ほんとにわかりました。

それから、最後なんですけれど、渡辺先生の6年生

の指導を見させてもらったんですが、私、東京で暮らしていると、「さあ、どうしたの、はやく答えなさい」、答え、答え、と、時間が切羽詰まった感じがするんですが、先生は待っています。だから、静かな授業なんです。先生はシーンとしていて、僕らはドキドキしながら数秒の時間をまっているんですが、それは考えさせているんだなというのに気づいて、非常にこれはおもしろいなと。普段は気づかない、書いている人間が使われているのを、光景をみると、非常になんかこうドキドキしました。このことは、私なりの言葉で、『毎日新聞』の再来週の水曜日のコラムに書きますので、乞うご期待(注 11月10日掲載)。今日はちょっと帰らなければいけないので。帰らせてください、すみません。

所澤 どうもありがとうございます。お引き止めをして申し訳ありません。石田先生、儘田先生からの非常に期待のあった将来の展望なんです、石田先生、どのようにお考えか、ちょっと皆さんにご披露していただけるといいなと思うんです。

石田 私のほうは、今年、道徳でやらせてもらったんですけど、道徳でかなりいろいろなよさというのが見いだせたと思いますし、素材を教材化していく楽しみもかなり体感できたのではないかとこのように考えておりますので、来年度は具体的にいうと、国語、社会、そして理科専科といいますかね、理科の免許教科の先生方もいますので、この3教科で新たにまた進めたい。NIEの指定を受けようが受けまいが、やっていきたいなと今のところ考えています。これは、先生方とまた話し合って決めることでもありますので、私の独断と偏見で決めるわけではありませぬので、先生方とよく話し合った中で、決めていきたいと考えております。それから、今日、やはり高校の先生方がたくさん見えていますけれども、教育長さんのほうにも、いろいろな高校の先生方の方にも今回の参加を流していただいたと同時に、教育長さんの方からも言われている「おまえだけで終わらすんじゃねえよ」というところもありますので、継続ということもうんと大事な視点のかなということも考えて、これから、考えていきたいというふうに思っています。以上です。

所澤 どうもありがとうございます。時間も終わりになっておりますが、私の感じたことを最後に簡単に言ってまとめとさせていただきます。今回

の授業、——実際に子供達の様子をみていて、皆さんもいろいろ感じられたんだと思うんですが、新聞機能だとか、新聞製作、新聞活用というそういうところに留まらないで、子供達は、新聞を通していろんなものを学んでいる。特に、道徳という視点で言えば、人と人との関わりを学びつつあるんだなということをとて強く感じました。自分が一員である社会の中の自分、社会的存在としての自分のあり方を学んでいる、それが、今回の実践発表会で非常によく見えたんじゃないかなというふうに感じています。それが、道徳教育としてNIEに取り組んだ意味かもしれませんが、しかし、新聞というメディアは本来そういう機能を非常によくもっているんだろうと思うんですね。インターネットを使って新聞記事の一部をのぞき見るだけでは見えないような、いろんなものが見えてくる。非常に古典的なメディアである新聞、デジタルではないアナログメディアである新聞を通して身につけていく、そういうことがとても感じられました。それがとても価値があることなんじゃないかというふうに思うんですね。社会的存在としての自分をアナログメディアをとおして

形成していく、——それは学校には絶対必要なことというんですか、日本の社会が次の世代に継承していかなくてはいけないことなんじゃないかというふうに、僕は、今日改めて感じた次第です。

そういう学びの機会をつくっている実践校のNIE活動ですが、しかし、実践校は、指定校が終わってしまったら消えてしまうのが現状です。指定校が転々と変わっていく中でいつも、打ち上げ花火のように終わっていくのでは、やっぱりつまらないというか、もったいないと思うんですね。これをなんとかできないかということ改めて感じました。これ以上は繰り返になるので言いませんが、多分、ここまでいうと、最後、吉成先生がいろいろなことをおっしゃりたい状態になっていると思いますので、吉成先生にそろそろ講評ということで、マイクをまわしたいと思います。

どうも、ありがとうございました。これでパネルディスカッションの部を終わらせていただきます。

(拍手)

【文字化担当 佐藤久恵】

講 評

吉成勝好

山本 それでは吉成先生よろしくお願ひいたします。
吉成勝好 みなさん、今のシンポジウムでもう言い尽くしてありますので、私が何かつけ加える必要はないんですが、少し感想をのべさせていただきます。今日はすばらしい発表とすばらしいシンポジウムだったと思いました。校長先生の厳しいリーダーシップのもと、本日を迎えた北小の先生方に敬意を表したいと思います。

NIEという言葉が日本に入ってきたのは、1985年の新聞大会でした。新聞界から教育界に日本でもやろう、やってほしいと呼びかけたんです。今年の新聞週間は終わったばかりですから、ちょうど25年経ちました。この25年間、心ある方々が営々と努力なさってきました。でも、先ほど儘田先生もおっしゃったようになかなか広まらない。実践校でいろんな成果を上げて、また、その人が異動するとその学校はなくなってしまう。新聞がないと新聞利用できませんから、新聞協会

から、新聞提供がなくなると途絶えてしまう、ということ繰り返してきました。

しかし、今、まったく新しい段階に入ってきていると、私は思っています。今まで個人やグループ、研究会等でやっていて、国語と社会科がほとんどだったのが、儘田先生のおっしゃるとおり、新しい学習指導要領では、情報教育という大きな流れの中に位置づけつつ、各教科に取り入れられています。この4月から、小学校の新しい教科書が使用されます。どの社の教科書にも新聞がたくさん取り上げられています。新聞の機能学習、新聞を使った教科学習、そして、新聞作りが扱われています。日本の教育は教科書があつてなりたっていますし、また教科書にあれば、先生は教えます。ですので、これから、NIEに追い風が吹くと思っています。何故かという、NIE実践校になったから新聞を使わなきゃと、どこかに投げ込みで思いつきのやるというのではなくて、これからは教育課程の中に位

置づけられた新聞活用が可能になるからです。そして、そうでなければいけないのです。

教育課程に位置づけるとは、どういうことかという、私は2つの面があると思うんです。一つは、日常化です。日常活動、日常の教育課程の中に位置づける。典型的なのは本校で今日やっていた「NIEタイム」ですね。日常的に、毎日とか毎週、子ども達が新聞を広げてスクラップをする時間を確保することです。北小の場合は、他にも「学年の主張」とか、「はがき新聞」とかもあります。最初の研修会でお話したとき（2009年9月の研修）にスクラップの活動のやりかたを取り上げたのですが、これが基本だと思っています。NIEのもっとも初歩的で、もっとも基礎的な活動であり、かつ究極の姿が新聞スクラップではないでしょうか。NIEは、スクラップにはじまりスクラップに終わる、というのが私の考えです。幼稚園・保育園の子供が新聞のカラー写真を切り抜いて、「きれいだね」って楽しむことから、80、90のおじいさん、おばあさんまで。自分が世の中を学んでいく、生涯学習を続けていく上での有力な方法・スキルの一つとして身につけていくのが新聞スクラップです。これが、学校生活の中に位置づけられることは、それこそ最高の教育課程だろうと思います。

もう一つは教科、道徳、領域等のめあての達成のために新聞を使う、そのために教育課程に入れることです。教科の目的を効果的に達成するために、我々はいろんな教材を用意しているわけですから、もちろん新聞だけが教材ではありません。新聞がより有効と思われるところに、有効な形で取り入れるということになります。例えば、選挙。社会科で選挙を学ぼうとしたときに、総選挙の機会に新聞記事を使うのはとても有効です。それから、4年生の「各地のくらし」なんかのときに、新聞に載っている天気図や気温の変化、北海道の気温と沖縄の気温を比べてみるということが可能です。つまり教育課程の各教科のめあて達成のための教育方法として新聞を有効に取り入れるというスタンスです。

石田先生もおっしゃったように新聞は素材です。新聞を使うときの最大の問題点は、新聞は教育のためにつくられたものではないということです。ですから、これを教材にするには、それなりの工夫が必要です。私は、教材がよい教材である条件を6つ考えています。1つは「ねらいの達成に役立つ」こと。新聞がはじめ

にあるのではなくて、教育のねらいの達成に役立つものを選ぶ。2点目は「子供の発達段階や実態にあっているもの」。子供の発達段階にあってない記事もたくさんありますね。3点目は「子供の興味関心を刺激するもの」。今興味関心を持っていることだけでなく、新聞によって興味関心が喚起されるということも含めて、「刺激する」の意味を考えています。4点目は「思考の広がりや深まりが期待でき、発展性があるもの」を望みたいと思います。5点目は「内容自体に価値があるもの」。つまり、感動のあるもの。人間理解に役立つとか、子供自身の生き方に関わる、それ自体に価値があるようなものを選びたいものです。6点目は「一定の時間内に終わる」こと。これは絶対に必要です。とかく新聞をやりますと授業時数は普段よりも大幅に延長する、という例が見られますが、延長せざるを得ないような教材は、やはりある意味では邪道だろうと思います。

「教材として新聞を使う」という場合に、その意味は2つあると私は思っています。

一つは、新聞記事をそのまま使うこと。先ほど言いましたように、新聞は教育のために作られたものではありませんが、高学年だったらある程度読むことは可能です。それでも、あまり小難しいものはふさわしくありません。最近は、新聞社もNIEを意識していますので、記事の書き方が相当にやさしくなりましたね。私はNIEというのは、教育改革運動であると同時に新聞改革運動、新聞紙面改革運動だと思っています。それでもなおかつ小学生には難しいものが多い。そこで、新聞記事を教材に加工するということが必要になってきます。今日の北小学校の授業でもありました。NIEというと、「新聞をまるごと使う」ことと思っ

ていますが、必ずそのまま使わなきゃいけないのではないのだということを言いたいのです。例えば拡大コピーをする、ルビを振る、要約をするということも時に必要だと思います。

もう一つは、新聞記事を使うのではなくて、「新聞情報を使う」という使い方です。新聞記事を何かどこかに入れないとNIEでない、ということじゃなくて、新聞から得た情報を教材として使うこともある。低学年の場合に、例えば、「新聞記事を先生が見ていたら、今日はこんなことがあったんだよ、こんなふうを書いてあったんだよ」と言うことで、私はそれは、充分新聞

情報を使ったことになると思います。あんまり記事そのものにとられる必要はないと思っています。

そこで、今日の授業についてです。全部のクラスをざっと見てまわっただけで詳しく見られなかったのですが、ほんの一言ずつ感想を述べさせてもいただきます。

先ほど石田先生が、特別支援学級のA組がたいへん難しいテーマを取り上げたことを話されました。(題材名：ペットをかうということ、内容項目：生命尊重) 1対1でやるという、あの方式も一つのとてもいいやり方だなとは思いました。同時に、あの授業は実はすごい問題提起を含んでいると思いました。

NIEの熊本大会に行った方は、この会場にもいらっしやるでしょう。あの大会、すごかったですね。千人以上も入るような大ホールの舞台の上で授業をしたんです。ここのA組がやった「ペットをかうということ」と同様のテーマでした。捨てられ殺処分になるペットをどう考えるか。授業では、ペットの救出運動している人がゲストティーチャーとして呼ばれました。立派な行動だとおもいます。その授業の様子は、どの新聞社の方も取り上げて、「すばらしい授業だった」と報道されました。けれども、それを見て、道徳の授業としてはちょっと疑問を持ちました。所澤先生、石田先生も同じような感想をおっしゃっていたと思います。どういうところが疑問かということ、つまり、あるべき正義が提示されているんです。結論は、ペットを飼う責任を持たなければならない。当然ですね。飼うからには責任もってやらなければいけないよということは。要するに、副読本的な考え方に向かって授業をまとめたんですね。でも、道徳の授業としてそれだけでいいのだろうかということです⁽³⁾。

今日の杉戸敬治先生の授業は、そうじゃなくて、ペットを捨てる人たちってどういう人？ ふつうの人なら、どういう気持ちで、なんでそうしたのかな？ これだけ50万匹ものペットが捨てられ殺処分になっているということは、普通の人捨てているんですね。とすると、やむにやまれないというか、いろんな事情があるわけです。そこにはその人達のすごい葛藤がある。ペット捨てるのはけしからん、飼うなら最後まで面倒を見なきゃならんというのが一つの正義の立場ですけれども、私は会場で授業を見て、あの子供達の親の中に、もしかして、ペットをやむなく捨てた、保健

所に連れて行った親もいるかもしれない。そういう子供達は黙っていたのじゃないか。多様な見方があったり感動があったり、それぞれの立場があるということをつまえて、自分の意見を持っていくということが、必要じゃないかなと思いました。新聞記事にも正義を振りかざす、あるいは振りかざすというわけじゃなくて、結論が見えているようなものがありますから、新聞記事を使えばいい道徳の授業ができるというわけではありませんね。やっぱりどう素材を料理するか、どう使うかということが、とても大事ななと思いました。

1年生「ありがとう」(題材名：ありがとう、内容項目：感謝)の山口恭子先生、阿部恵光先生。よかったですね。新聞と具体物を提示していました。具体物を取り上げたことによって1年生らしいすごく活発な話ができたとします。

2年生「きまりをまもる」(題材名：時間通りなのに、内容項目：規則の尊重)。森川薫先生。発言を吹き出しにして先生が書いていました。いろんな人の立場の発言があって多様な見方が引き出されているところがとてもよい授業だと思いました。

3年生「かがやく自分になるために」(題材名：難病越え 植物描く、内容項目：誠実・明朗)、岡部千亜紀先生。板書がすごく構造化されていて、思考の流れがスムーズにっていましたので、熟達した指導だなと思いました。

4年生「あなたは声をかけますか」(題材名：席を譲られたらば 素直に座れば、内容項目：思いやり 親切)。関根寿美先生の、これは本当に葛藤のある授業、考えさせる授業でした。「声をかける」「かけない」に分かれて考えた授業でした。新聞記事をつつうに使ったら、「お年寄りには声をかけましょう」ということで終わるのに、内面に目を向け、自分だったら多分声をかけられないんじゃないかというようなことの葛藤を取り上げたと思いました。

5年生「かけがえのない生命」(題材名：死刑制度を考えよう、内容項目：公正・公平)。三木貴博先生。難しいですね、お年寄りの世界は。子どもにはまったく未知の世界です。未知の世界には、初めからは興味関心がないわけですから、興味関心のない未知の世界をいかに子ども達の身近に引き寄せるか、ということで新聞記事が役に立つ。しかも、授業では広告を取り上げました。これは非常に柔軟な発想だなと思って、と

でも感心しました。

6年生「命のリレー」(題材名：脳死移植を考えよう、内容項目：生命尊重)。渡辺祐希先生の臓器移植の授業。さきほど、この授業は、葛藤だけじゃなくて、自分の態度の表明、自分がどう生きるかというそこまで迫る問題を取り上げて、とてもすばらしいと、どなたかがおっしゃいましたけれども、静かに思考・黙考する時間が、やはり六年生ですね。どんどん意見が出て、活発な論議ができるのももちろんいいですけども、やはり6年生は、静かに自分の内面に向かって思考を深めることが重要であると感じました。

特に私が、すばらしいと思ったのは、ああいう授業をすると、とかく道徳では、最後「どう思いますか」と問いかけて、「私だったら臓器移植します」「しません」と、「臓器移植」をする方に手を上げたり、しない方に手を上げたりして、「今の気持ちはそうなんだね」というふうにまとめるんですが、先生は「この授業を考えるきっかけにしてほしい」というふうに結ばれました。この終わり方はすばらしい、これが世の中を学ぶということでしょう⁽⁴⁾。

NIEでは、「教材から学習材へ」ということを強調します。今までの社会科でも、関口先生がおっしゃいましたが、昔から授業で新聞を使っていました。ですから、はじめてNIEということが言われた時に、「今さらなんでNIEなんて横文字使って。俺なんかずっと前からやってるわ」と言う人がいっぱいいました。私はそれは違うと思いました。今まで私たちがやってきた新聞活用って、先生がよかれと思った新聞記事を子どもに渡していた。先生が切り抜いて、「こういう記事があるよ」と。とかく、先生の押しつけになりがちで、中には特別な思想信条が背景にあったりして。それで管理職に睨まれたりということもありました。そうじゃなくて、NIEの新しさは、学習材、子ども自身が学ぶ材料として使うということに大きな意味があります。

学習材とは何か。私は、こう思います。吉川英治という人がいますね。小学校も出ないで、転々と職業を渡り歩いて、最後に有名な作家になった人です。東京の吉川英治記念館に行くと、色紙を売っています。有名な「我以外すべて我が師」という言葉。これが学習材の考え方です。世の中にあるものは全部自分の学習、自己教育のための材料だということです。子どもたちはみな毎日町を歩いている、そしていろんな事に会

う、変な大人にも会おうし、子ども同士のトラブルもある、そういうことが、すべて自分が人間として成長する上での学習材であると思います。

しかし、生の世界はあまりにも混沌としている。新聞はそれを、必要な情報を抽出し、整理し分野ごとに分けて、解釈し毎日提示してくれる材です。つまり生きた社会の縮図が新聞にありますから、そこから色々なことを学ぶことができます。教材で与えるのと同時に、そういうふうに分けて自分自身で社会を、——生の社会でなく、新聞という窓を通して見ていく。それはすごく有効なことで、そこに新聞を使う意味がある。新聞には、美しい話だけでなく、いやなニュースも汚いニュースもあります。その中で子ども達は、自分の感性や見方を鍛えていく。ただ、新聞によってその抽出の仕方、選び方、整理の仕方、解釈の仕方は違いますから、まったく鵜呑みにはできない。そこで、いわゆるクリティカルリーディング、批判的な読み、評価的な読み、比較的な読みということが必要になります。人工的に選ばれた社会、世間ですから、それに対する目がなければいけない。その目を育てるのに有効なものも新聞だろうと思います。

NIEの大きな目的として狙いたいのは、いわゆるPI-SA型の読解力です。PISAの問題文はすべて現実社会なんですね。OECDが狙っているのは、学力一般じゃなくて、これからの社会を生きる、これからの混沌とした21世紀の世界を生き抜いていく力を持った子どもを育てること。そのための力は何か。3つのことが考えられます。1つ目は、現実には起きている葛藤のある場面をいかに読み解くかということ。それはNIEの目指しているものと全く同じです。2つ目は社会的な問題への問題意識。現実の社会にはこういう問題がある、こういう問題を解決しないと人は幸せに生きられないんだという問題意識。3つ目は、その社会に自分が主体的に関わるということ。今日の道徳はまさに、そういう内容でした。

日本で今まで我々が教えてきた読解力というのは、「主人公はどう思いましたか？」とか「この状況をどうとらえますか？」とかいうという解釈でした。PISAのテストはそうじゃなくて、必ず自分自身の考えを表現する。根拠をもって答える。「あなたはどう思うか？」「なぜそう思うか？」を問う。「好きだからだ」とか「こう感じました」じゃなくて、「ここに書いてあるこの事

実から、こういうことが読み取れる」。自分がその問題にいかに関与するかとこのところまで問われる。試験に受かって大学に入るのだけの力じゃなくて、これからの社会を生き抜いていく力、また、社会を前進させる力を持たせていくのが、これからの教育だと思います。そのために、PISAのテストもあるし、我々のNIEの学習もあると思います。

冒頭の話に戻りますと、今すぐ学校教育の様相が変わってきたと感じています。板倉北小学校のような学校が全国に増えている。石田先生のような校長先生がいろんなところに出てきていますし、学校全体で教育課程にNIEを位置づけているところも出てきました。東京ではずっとNIEを私たちとやっていた持田浩志先生が武蔵村山市の教育長になって、市全体がNIEを教育課程に位置づけてやろうとしています。関口先

生のいらっしゃる北区は教育長が音頭をとって、北区に「新聞大好きプロジェクト」というのを立ち上げて、区全体で新聞を読む子を育てようとしています。全国的にもそういう動きがあって、その中で先進的な役割を果たしているのが板倉北小だと思います。これからは、実践者が異動したらなくなってしまうということのないように、石田先生がいなくなっても北小のNIEが続くのを楽しみにしています。5年後くらいにまたそっと見に来て、それを確かめたいと思います。

今日は、感動的な発表会本当にありがとうございました。

(拍手)

山本(総司会) 吉成先生どうもありがとうございました。

【文字化担当 佐藤久恵】

注

- (1) 所澤 潤・岩上 薫・吉成勝好・赤池 幹・関口修司「教室の壁を取り払うNIE—東京都北区立王子第三小学校NIEシンポジウム2009の記録—」『群馬大学教育実践研究』第28号、pp.227-240、2011
- (2) 『平成22年度 授業改善に向けた授業実践記録集 ～NIEを取り入れた道徳を通して～』〔群馬県邑楽郡板倉町立北小学校（5月～7月までの記録）〕。当日配付資料。
- (3) この時の様子については、所澤が『上毛新聞』に寄稿し、2010年8月10日第10面に「可能性を感じた一言」という題目で掲載された。本文は以下のとおり。

「ペットとして飼われていた多くの犬が自治体の保護センターを通して殺処分されている。それを悲しんだ女優が新聞に寄せた文章をもとに、命の大切さを学ぶ小学校6年のNIE公開授業が行われた。処分される犬を1匹でも助けようとセンターから引き取った女性が、途中でゲストとして現れ、自分の気持ちを児童に語った。ステージに学級の児童全員を集め、担任教師が授業を行うという意欲的な企画である。

しかし、牛の口蹄疫殺処分問題の授業のヒントを求めて参加した宮崎県の女性教師が、フロアから見事に問題点を突いた。「新聞記事も女性本人も、非常にインパクトがある。子供達は反論することができず、考えが深まらないのではないか」

今大会のハイライトであった。同行された板倉北小の石

田校長が、私に「命が大切なことは皆知っている。殺さなければならぬ、という矛盾に向き合うのが6年生の道徳の授業です」とささやいた。本県NIEの可能性を感じた一言であった。」

- (4) この授業の様子は『毎日新聞』2010年11月10日の「発信箱」で、滝野隆浩編集委員によってまとめられているので一部を抜萃する。

「この日、6年A組は道徳の授業で「臓器移植」を考えると。[略] A組の19人は事前の課題として「死とは何か」を考えてきた。〈心臓が止まる〉〈からだ冷たくなる〉だけじゃない。〈心がなくなること〉〈家族から見放されること〉の意見もあってどきどきとする。

[略] 渡辺祐希先生(36)は子供たちとのやりとりがうまい。一つの死が別の命につながって良かったね……などという単純な図式に、もう児童の心が収まらないことを知っている。「特別ゲスト」の石田成人校長がお母さんが脳死になった話をする。さあみんな、家族が脳死になったらどうする？ じゃあ、自分になったらどうだろう？

当てられて、考え込む子もいた。渡辺先生はじっと待っている。4～5秒。教室がしんと静まる時間は、みんなで考える時間だ。授業の最後に、先生は当日朝の地元紙の記事を見せる。「小6 女児が自殺」の大きな見出し。同じ群馬県の桐生市で起きた、同じ学年の子の痛ましい事件を、知っている子は多かった。」

(しよざわ じゅん・いしだ なりと・せきぐち しゅうじ・よしなり かつよし・わたなべ ゆうき)

